

第4回：辻堂の魅力（穴場・見どころ）・展望と目標・メッセージ

これまでの歴史探訪で触れなかった穴場・見どころを紹介します。

北の寺宝珠寺の東方に天王山といわれる松林の山頂に天王社があります。祇園精舎の守護神で疫病除け（えきびょうよけ）の仏として信仰された牛頭天王が祀られていました。辻堂村の総鎮守諏訪神社を守るため村の四方に建てられた四つの社のひとつですが、この小高い山一帯の風情は古く八のヶ原、八松ヶ原と呼ばれていた時代の風情をそのまま残した場所で、まさに穴場スポットといえます。

もう一つ紹介したいのは辻堂6-19にある勤久公園の「中村武羅夫文学碑」です。中村武羅夫は1886年に生まれ、1949年に亡くなりました。大正から昭和20年代にかけて新聞記者や作家として活躍し、当時文壇で台頭したプロレタリア文学に対して芸術派文学を志向して『誰だ 花園を荒らす者は』と題する評論を1928年に発表し、プロレタリア文学を攻撃しました。広大な屋敷跡と庭園は公園となり、『誰だ 花園を荒らす者は』の衝撃的な文章を刻む碑文が、川端康成、芥川龍之介、丹羽文雄、伊藤整、今東光、石川達三、大宅壮一、船橋聖一など当代一流の文士21人が発起人となって建てられました。

第二回ではふれませんでしたでしたが、全国初の旧国鉄請願駅となった辻堂駅の開設にあたっては、先の十七氏族が請願の推進役となりました。記念碑の裏面には寄付をした人々の名前が記載され、中には茅ヶ崎市の人々の名前もあります。これは西改札口が茅ヶ崎市に入り込んでいるためといわれています。国鉄・鉄道院を動かすという一大事業を実現した背景にはこの十七氏族の絆があったからにほかなりません。

見どころには当たらないのですが、「綱より場」あるいは「綱より道」とよばれる場所が浜見山交差点から駅に向かって30mの地点にあります。辻堂村は江戸後期の天保年間（1830-44）には6軒、最盛期の明治末には11軒の綱元がありましたが、現在は1軒の観光用地引網の綱元が残るのみです。綱元が集積していた元町四丁目の「緑の広場」東側から南西に向かい、昭和通りに向けての道は直線で地引網用の綱を作っていたところから、「綱より場」あるいは「綱より道」とよばれました。当地の名産であった「たたみ鯛」を庭に干す家も多くあったそうです。



八森稲荷社境内の鉄板

西町の八森稲荷社境内には日露戦争でその威力により勝利に貢献したを使った大砲で試し射ちされた厚さ6cmの鉄板が奉納されています。下瀬火薬は明治時代の海軍技師下瀬雅允（まさちか）がドイツから持ち帰り、分析・製造した火薬です。これも見どころのひとつといえます。

今後の展望・目標を話させていただきます。

今回の放送に際しては、国や自治体の公式文献だけでなく、郷土史家の執筆した地誌を数多く読み原稿を執筆しましたが、伝承・逸話が多くその正当性が判断できないものが多くありました。今回触れなかった場所に、作兵衛山跡、貝殻山跡、源右衛門山跡、ちょんぼり山跡、赤土山跡があります。いずれも小高い砂山と推定されますが、現在は跡形もなくなっており、正確な情報もありません。

作兵衛山は、勘久公園から湘南新道に至る手前の山で明治8年（1875）にはここから茅ヶ崎のえぼし岩に向けて海軍が大砲の試し射ちをしたといわれます。作兵衛という人が保有していたとのこと。

源右衛門山は、小字出口が湘南新道に面したところにあり、正面右にありました。交差点の名前になった浜見山ともいわれています。木村源右衛門が保有する砂山で、漁師が魚群を発見するために山の上の松の木に登り海の様子を眺めたところから、浜見山の名称がついたといわれています。

辻堂海岸沿いの現浜見山派出所付近にあった赤土山は、赤土で築かれた山で下瀬火薬の威力を試す大砲の目標となっていました。大砲は日露戦争前に撤去され、「名所赤土山」と記した塔があったのですが、第二次大戦後には道路拡張で撤去されたそうです。

これらの伝承は郷土史研究としては重要です。十七氏族が連綿と受け継いだ当地だからこそ、各氏族の家庭には古文書が収蔵されているのではないかと思います。藤沢市には全国的にも珍しい文書館というものが存在し、そのような文書が日の目を見て新たな史実が積み重ねられると素晴らしいですし、調査の結果、説明板が該当場所に建てられると嬉しく思います。新たに当地の住民となった人にとっても、より一層誇れる地域になるのではないかと期待します。